

上野殿後家尼御返事

文永二年七月一日 四四歳

御供養の物種々給^たび^{おわ}畢^{そもそも}んぬ。抑^音 上野殿死去の後はをとづれ^信冥途より候^聞やらん、きかまほしくをばへ候。たゞしあるべしともおぼへず。もし夢にあらずんばすがたをみる事よもあらし。まぼろしに^幻あらずんば^見みゝえ給ふ事いかゞ候はん。さだめて^姿霊山浄土にてさばの事をば、ちうやに^暈きゝ^夜御覧^聞じ候らむ。妻子等は肉眼なれば^見みさせ^聞きかせ給ふ事なし。ついには一所とをばしめせ。生々世々の間ちぎりし^契夫は大海のいさごのかずよりも^多くこそをはしまし候ひけん。今度のちぎりこそまことのちぎりのをとこよ。そのゆへは、をとこのすゝめによりて法華經の行者とならせ給へば^拜仏とをがませ給ふべし。いきてをはしき時は生の仏、今は死の仏、生死ともに仏なり。即身成仏と申す大事の法門これなり。法華經第四に云はく「若し^よ能く持つこと有らば即ち仏身を持つなり」云云。夫^{それ}浄土と云ふも地獄と云ふも外には候はず、ただ我等が^胸むねの間にあり。これをさとるを^迷仏といふ。これにまよふを凡夫と云ふ。これをさとるは法華經なり。もししからは、法華經をたもちたてまつるものは、地獄即寂光とさと^間り候ぞ。たとひ無量億歳^間のあひだ権教を修行すとも、法華經をは^離なるゝならば、たゞいつも地獄なるべし。此の事日蓮が申すにはあらず、釈迦仏・多宝仏・十方分身の諸仏の定めをき給ひしなり。されば権教を修行する人は、火に^焼やくもの又火の中へ^入いり、水にしづむものなを^沈ふちの^尚そこへ^淵入るがごとし。法華經をたもたざる人は、火と水との中に^底いたるがごとし。法華經^{ひぼう}誹謗の悪知識たる法然・弘法等をたのみ、阿弥陀經・大日經等を信じ給ふは、なを火より火の中、水より水の^底そこへ入るがごとし。いかでか^{くげん}苦患をまぬかるべきや。等活・^{むけん}黒繩・無間地獄の火坑、^{くれん}紅蓮・^{だいくれん}大紅蓮の氷の^沈底に入りしづみ給はん事疑ひなかるべし。法華經の第二に云はく「其の人命終して阿鼻獄に入り是くの如く^{てんでん}展転して^{むしゅこう}無数劫に至らん」云云。故^{しょうりょう}聖^免靈は此の苦をまぬかれ給ふ。すでに法華經の行者たる日蓮が檀那なり。經に云はく「設ひ大火に入るとも火も^{あた}焼くこと能はじ、若し大水に^{ただよ}漂はされんに其の^{みな}名号を称せば即ち浅き処を得ん」と。又云はく「火も焼くこと能はず水も漂はずこと能はず」云云。あらたの^頼もしやたのもしや。

詮ずるところ、地獄を外にもとめ、獄卒の鉄杖、阿^{あぼうらせつ}防^呵羅^責刹^声のかしゃくのご系別にこれなし。此の法門ゆゑしき大事なれども、尼にたいしまいらせておしへまいらせん。例せば^{もんじゆ}童女にたいして文殊菩薩は即身成仏の秘法をとき給ひしがごとし。これをきかせ給ひて後はいよいよ信心をいたさせ給へ。法華經の法門をきくにつけて、なをなを信心を^励はげむをまことの道心者とは申すなり。天台云はく「^{じゅうらん}從^に藍^{しやう}而^青」云云。此の釈の心はあいは葉のときよりも、なを^染そむればいよいよ^青あをし。法華經はあいのごとし。修行のふかきはいよいよあをきがごとし。地獄と云ふ二字をば、つちをほるとよめり。人の死する時つちをほらぬもの候べきか。これを地獄と云ふ。死人をやく火は無間の火炎なり。妻

子眷属けんぞくの死人しにんの前後ぜんごにあらそひゆくは獄卒ごくそつ・阿防羅刹あぼうらせつなり。妻子等しよのかなしみなくは獄卒ごくそつのこゑなり。二尺五寸の杖は鉄杖なり。馬は馬頭めず、牛は牛頭ごずなり。穴は無間大城むけんたいじょう、八万四千のかまは八万四千の塵勞門じんろうもん、家をきりいづるは死出しでの山、孝子の河のほとりほとりにたゞずむは三途の愛河なり。別に求むる事はかなしはかなし。此の法華經をたもちたてまつる人は此をうちかへし、地獄じやくごうどは寂光土かえん ほうしん、火焰くわえんは報身如来ほうしん じゆくねはんの智火、死人は法身如来ほうしん じゆくねはん、火坑は大慈悲為室おうじんの応身如来、又つえは妙法実相のつえ、三途の愛河は生死即涅槃しよじそくねはんの大海、死出の山は煩惱即菩提の重山なり。かく御心得させ給へ。即身成仏とも開仏知見とも、これをさと悟りこれをひらく開を申すなり。提婆達多だいばだつたは阿鼻獄を寂光極楽とひらき、竜女が即身成仏もこれより外には候はず。逆即是順の法華經なればなり。これ妙の一字の功德なり。竜樹菩薩りゆうじゆ ぼさつの云はく「譬へば大薬師の能く毒を変じて薬と為すが如し」云云。妙楽大師みょうらくだいし云はく「豈伽耶あにがやを離れて別に常寂を求めん、寂光の外別に娑婆有るに非ず」云云。又云はく「実相は必ず諸法、諸法は必ず十如、十如は必ず十界、十界は必ず身土なり」云云。法華經に云はく「諸法実相乃至本末究竟等」云云。寿量品に云はく「我実に成仏してより已来無量無辺なり」等云云。此の經文に我と申すは十界なり。十界本有ほんぬの仏なれば浄土に住するなり。方便品に云はく「是の法は法位に住して世間の相常住なり」云云。世間のならひとして三世常恒じょうごうの相なればなげくべきにあらず、をどろくべきにあらず。相の一字は八相はつそうなり、八相も生死の二字をいはず。かくさと斯るを法華經の行者の即身成仏と申すなり。

故聖靈しやうりようは此の經の行者なれば即身成仏疑ひなし。さのみなげき給ふべからず。又なげき給ふべきが凡夫のことわりなり。ただし聖人の上にもこれあるなり。釈迦仏御入滅のとき、諸大弟子等のさとのなげき、凡夫のふるまひを示し給ふか。いかにもいかにも追善供養を心の及をよぶほどはげみ給ふべし。古徳のことばにも、心地を九識にもち、修行をば六識にせよとを教しへ給ふ。ことわりにもや候らん。此の文には日蓮が秘蔵の法門書かきて候ぞ。秘しさせ給へ、秘しさせ給へ。あなかしこ、あなかしこ。

七月十一日

日蓮花押

上野殿後家尼御前御返事